

終章

『沙石集』諸本について、古本系を中心として、流布本系へ移行する狭間に位置する伝本までを対象として考察を加えた。俊海本が最も古態の本文を有していることは動かないが、完本ではないので、米沢本が今後も古態を示す本文の代表として使用されることとなるであろう。しかし米沢本自体も、元は裏書と推測される加筆があると思われ（米沢本は裏書の内容も本文の如く続けて記載するので、その線引きが微妙ではあるが）、本文の性格をよく吟味した上で諸本論に使用することが肝要である。

十帖本の梵舜本については、従来の草稿本的な面影を残す本、という位置づけを見直し、増補本として扱った。しかし本文自体は、米沢本と共通するものが他本に比して多く、反対に刊本との共通点も多いことなど、成立には複雑な過程を経ていることを想像させる。第二部第二章第三節において述べたように、梵舜本は卷二の地藏関連説話の収録姿勢から言えば、永仁三年の改訂を経ていると考えられた。この点に関して言えば、永仁三年の改訂を経ないと思われる成實堂本よりも、梵舜本の本文は新しいことになる。しかし卷七（米沢本・成實堂本では卷九）については、成實堂本はむしろ刊本寄りの本文を持ち、梵舜本は米沢本に類する本文を持つ、といった具合に、その本文の新古が逆転してしまうのである。この間の事情を解き明かすのは大変困難なことであるが、梵舜本は卷一～卷十まで、終始一貫した系統ではなく、過去において別系統の巻々が、取り合わされた可能性がある、ということも、考慮に入れておかねばならない。現時点では、米沢本からそう遠くないところで分化し、説経の場での必要性などから、独自の説話群を増補した特殊な本である、と解釈しておきたい。

また成實堂本については、梵舜本より流布本系統の本文生成に関与し、阿岸本や真福寺本との関連が濃厚な本と考えた。梵舜本よりも本文は新しいものであるとの印象を受けるが、卷二に関して言えば永仁三年の改訂は受けておらず、徳治三年の改訂も当然受けていない。裏書の数々は、後々削除されたものが目立った。本文の新古の判定で特に苦慮したのは、この梵舜本と成實堂本の前後関係であり、確実な答えを出すことには慎重にならざるを得ないが、『沙石集』伝本全般の流れから見れば、梵舜本と成實堂本は同じグループに入れて良い性格の本と考えている。ここで主要伝本の、永仁三年と徳治三年の改訂の有無を表にしてまとめておこうと思う。

	俊海本	米沢本	梵舜本	成簀堂本	阿岸本	内閣本	長享本	東大本	神宮本	岩瀬本	刊本
永仁三	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○
徳治三	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○

次に古本系諸本から流布本系諸本へ移行する際の問題点を含む伝本として、内閣文庫本、長享本を取り上げたが、内閣文庫本については、本文は流布本系統に間違いなく、豊富な裏書もそのほとんどが刊本では本文化されており、刊本系の本文生成に大いに益した内容をもつと判断した。この点、裏書の多くが刊本には生かされなかった成簀堂本の裏書の性格と異なっており、裏書の生成にも、いくつかの段階があり、無住の試行錯誤によって削除、加筆が繰り返された結果であろうと考えている。長享本については、流布本系の本文を持ちながら、刊本とは異なる表現が目立ち、特に巻九においてその傾向は顕著であったが、長享本の独自性が、『沙石集』諸本の全般に渡って、影響を持つものであったかどうかは疑問である。その特質は長享本の中で完結しており、『沙石集』諸本の展開にはあまり関わりを持たないのではないかという感触を持った。しかし流布本系諸本の中で最古の伝本であるから、今後類似した特色をもつ伝本の発見があった場合には、その特色が再び注目される可能性はある。

以上のことを整理して、細部は無視して大まかな流れを示すと、

俊海本→米沢本→梵舜本→成簀堂本→内閣第一類本→長享本

のようになる。

さて今後の展望について少し述べると、長享本以降の伝本についての精査を進めなければならないだろう。先の表からわかるように、徳治三年の改訂を経たグループに属する、東大本、神宮本、岩瀬本の性格を見極めねばならない。三本とも、無住自身の徳治三年の識語を載せており、本文の成立段階としては最終期に含まれるものであるが、各本に独自の内容を持っており、最終期の中での前後関係を解明する必要がある。特に東大本については、他の二本と異なる部分がかかり指摘できるので、その間の事情を探ることにより、流布本系諸本の展開が明らかになることと思う。

現在確認できる伝本の本文研究を進めれば、『沙石集』が無住の改訂によって、または多少の後人の手を経て、如何なる変化を遂げたかを、ある程度把握することが出来るだろ

う。しかしそれだけでは、無住が最終的に認めた『沙石集』は果たしてどの伝本に通ずるのか、無住が『沙石集』を起稿後、休筆したのはどの巻で、またどこから続けたのか等、どうしても解明できない問題がある。いわゆる「結論」というものが、諸本論には無きに等しいように思う。しかしこれはもはや資料不足というしかなく、謎を解くような伝本の出現でもない限りは、知りようもないことなのかもしれない。ただ幸運にも、今後その新しい伝本が出現した際に、周知の伝本の関係性については既に熟知し、新出伝本の内容と価値を正統に評価できる知識を持っていただけるように、諸本研究は地道に続けていくしかないと考えている。

底本一覽

『沙石集』

俊海本…久曾神昇編 古典研究会叢書第二期『沙石集 一』(汲古書院 昭和四十八年)

米沢本…国文学研究資料館蔵マイクロフィルム

梵舜本…渡辺綱也校注 日本古典文学大系『沙石集』(岩波書店 昭和四十一年)

成實堂本…お茶の水図書館成實堂文庫蔵江戸初期写本より転写

阿岸本…国文学研究資料館蔵マイクロフィルム

真福寺本…安田孝子著『説話文学の研究—撰集抄・唐物語・沙石集』(和泉書院 平成九年)

内閣本…国立公文書館内閣文庫蔵本影印

長享本…京都大学付属図書館蔵本影印

神宮本…神宮文庫蔵本影印

岩瀬本…岩瀬文庫蔵本影印

慶長古活字本…深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引』影印編(勉誠社 昭和五十五年)

『雑談集』

三木紀人・山田昭全編 中世の文学『雑談集』(三弥生書店 昭和四十八年)